COMMUNICATION NEWS UP

TOKAI UNIVERSITY EDUCATIONAL SUPPORT CENTER

発行/東海大学教育支援センター　発行者/内田晴久　編集/教育支援センター教育支援課
発行日/2014年10月15日　URL:http://www.esc.u-tokai.ac.jp/

第59号

今の高等教育に求められる指導と支援

特集　P1～P2

学習補助学生 Learning Supporter
2014年度秋学期活動スタート

■春学期報告会 開催

2014年度第1回教育支援センター
FD研修会 開催　P3～P8

「ふつう」の大学生
―今の高等教育に求められる指導と支援―

■ はじめに～東海大学生のイメージ
■ 最近遭遇した大学生
～事例を通して
■ 相談、コミュニケーションの中から
■ 大学生の多様化の前に
高校生の多様化がある
■ 多様化する大学生
■ 現在の大学生の課題
■ コミュニケーションとは
■ 大学教員に期待される専門性
■ 質疑応答より

2014年度、湘南校舎18号館の完成に併せ、理学部と教育支援センターでは新たな取り組みとして、学習補助学生Learning Supporter（以下、LS）制度を試行的に導入しました。春学期は、2014年4月21日～7月18日の期間で活動し、合計32名の学生が相談に訪れました。

LS制度とは…
学生相互の学習支援体制で、相談者にとっては自主的な学びへと発展できるものとなり、相談を受けるLSにとっても教育的経験を積む機会となることが期待されている制度

2014年度秋学期は、2014年10月1日の13時から活動が開始されています。活動に先立ち2014年9月25日に開催されたLS事前説明会では、教育支援センター所長 内田晴久教授から「是非、質問や助けを必要としている後輩が来たら、手伝いをしていただきたいと思います。将来の皆さんにとっても大変良い経験になると思います。」と期待をこめたメッセージが送られました。秋学期は、春学期にLS第1期生として活動した学生の他に、今回LSに採用された学生も含めた新たな体制でのスタートとなります。

引き続き、18号館1階サイエンス・アトリウムでのLSの活動にご注目ください。

2014年度秋学期LS事前説明会

学習補助学生　Learning Supporter　春学期報告会 開催

理学部・教育支援センターでの取り組み

「自分達も初めは大学のことが全然わからなかったけど、頑張ってここまできたから、みんなの悩みを多少は聞けるかもしれない。何かあったら来てよ！」、「来てくれた後輩の要望を叶えたい！だから、学科が違って自分では答えられない問題も、LSの仲間を呼んで対応しました。」等々…2014年7月31日に開催されたLS報告会は、2014年度春学期に活動したLS第1期生の後輩に対する熱い思いがぎっしり詰まった報告会となりました。

相談場所等の改善提案だけでなく、「学生だからできること」という活動に対する姿勢や運営についても活発に意見が出されました。今年度、LS制度は試行的に運用されており、実際にLSとして活動した学生からの意見は今後の制度設計においても大変貴重な提言となりました。

こんな意見がありました　～LSからの提言～　ごく一部をご紹介します！

■広報について

・キャンパスライフエンジンやメールで広報しても読み飛ばしてしまうので、LS自身が1・2年生向けの授業の先生の許可を得て、授業（学科ガイダンスや実験のガイダンス）前に直接行って説明した方が認知度が上がると思う。

・LSの同意を得て、写真、学部学科、氏名、簡単な自己紹介等を公開（ホワイトボードに掲示する等）してもいいと思う。春学期の経験から、リピーターがいるということがわかったので、「今日はこの学生が担当しています」ということがわかった方がいいと思う。

■場所について

・部屋（スタジオ）で実施した方が話しにくいことも話せるのではないか。⇔部屋（スタジオ）だと入りにくくなるのではないか。

・現在のLSの場所を変えた方がいいと思う。サイエンス・アトリウムの中で普通に学習している人に混ざってしまうので、仕切り（パーテーション、ホワイトボード等）があればいいと思う。

■運営について

・数学、物理、化学のLSを同時に配置するのは難しいかも知れないが、対応に困ることがあった。

・1・2年の時間割をみて、更に実験との連動を考えて、LSを配置する方が効率的なのではないか。

・LSは1人ではない方がいいと思う。ネックストラップを提げて、1人でガチャガチャとパソコンを使っているようだと質問しづらいと感じた。何人かいて少し話している位の方が相談しやすいのではないか。

■LS同士のつながりについて

・自分の担当時間外であっても、LS同士で助けあうことはOK。時間外で呼ばれて対応するのも気にならない。

・LS同士のネットワークをつくりたい。事務的な付き合いだともったいないと思う。

・LSのミーティングがあってもいいと思う。

■その他

・学生だから理解できたり共感できたりするところがあると思う。だから、教えるという立場になるよりも、ちょっと知っている先輩でいいと思う。

・S-Naviでは、「こんな簡単なことを質問してもいいのかな…」と考えてしまうと思うが、LSなら、より身近な立場で接してあげられると思う。

・授業時間以外に先生に質問するのは勇気がいると思う。だからこそ、S-NaviやLSをもっと活用して欲しい。

・自分が1年次のときにLSがあったら利用したと思う。

事務スタッフ（教育支援課）より

春学期LSの活動では、ポスター制作等にも協力していただきました。これからも学習支援だけではなく、LS自身の成長も視野に入れた学生相互の積極的な活動になるようにサポートしていきたいと考えています。

報告会での意見を参考にしながら、LS制度の更なる発展につながるように検討していきます。

「ふつう」の大学生
―今の高等教育に求められる指導と支援―

文学部心理・社会学科　芳川玲子　教授

2014年度第1回教育支援センターFD研修会（2014年6月24日開催）より

芳川玲子　教授
（文学部心理・社会学科、
教育支援センター付）

教育支援センターでは、2014年6月24日に2014年度第1回教育支援センターFD研修会 「ふつう」の大学生―今の高等教育に求められる指導と支援―を開催しました。文学部心理・社会学科　芳川玲子教授により、大学が全入時代を迎え、高等教育に学ぶ学生の多様化が急速に進んでいる中で、今の大学生は何を考えているか分からない等と困惑している大学教員、大学での過ごし方が分からない等の悩みのある学生とのコミュニケーションのずれや、現在の大学生の特徴を豊富なデータとともに明らかにしていただきました。今回の講演内容を『COMMUNICATION NEWS　UP』にまとめましたので、是非ご一読ください。なお、豊富なデータが掲載された当日の資料を学内で公開していますので、ご活用ください（P8参照）。

※この記事は、2014年8月8日発行『COMMUNICATION NEWS　UP』（第59号　速報版）の掲載内容に一部記事を追加し再構成したものです。

はじめに～東海大学生のイメージ

私の出発点は教育相談です。その後、大学での学生相談やクリニックでのカウンセリングを経て、大学教員となりました。今回は、小中高での教育相談、カウンセリングで感じとった部分を交えながら話をいたします。

みなさんは本学の学生にどのようなイメージを抱いていますか？私の抱いているイメージは、明るく元気。そして、とても気さくです。表裏がなく、本当に素直だというイメージを抱いています。その素直なイメージを授業で考えてみると、話はよく聞いてくれるのですが、少し消極的で、「質問はありますか？」と言うとシーンとなってしまいます。また、都内の大学での私の授業経験と比較すると、かなり教員を尊敬、尊重してくれているということも分かります。しかし、この数年、本学でも、学生同士の喧嘩や教員との気持ちのすれ違い等、色々な話を聞いています。今回は、なぜこのようなすれ違いやコミュニケーションの問題が多くなったのか、そのことについて話をさせていただきます。また、このテーマと関連して、大学生の多様化についても取り上げます。ただし、大学生について語る以前に、高校進学率は90％を超え、高校生の多様化から大学生の現状があるのではないかと考えますので、この点についても触れていきたいと思います。

最近遭遇した大学生～事例を通して

事例を通して大学生のことを考えていきたいと思います。

事例1

授業について、人数が多すぎて嫌だという声を聞く反面、大教室での大人数授業の方がいいという学生もいます。大教室の授業では発言をせず、みんなと一緒に溶け込んで授業を受ける安心感があり、最近は、このような理由で授業を選ぶ学生も多いように感じます。そして、グループディスカッションや発表についてみてみると、大教室でグループディスカッションを行おうとすると、「苦手だからやらずに済ませることはできないか」と相談をされることがあります。また、ゼミや演習形式の授業でみんなの前で発表することが多くなると、同じように助けを求める学生がいます。どうも最近では、同じ年齢、大学生の中であっても、自分をみんなの前にさらけ出すことにある種の不安感や恐怖感に近いようなものがある学生がいるようです。

事例2

私が大学時代に最も面白かったのは、時間割を自由に組むことでした。しかし、最近は時間割を組めないという学生がいます。そのために、初年度は時間割の組み方についての指導が非常に大変になっています。理由を探るため、学生に話を聞いてみたところ、「膨大な情報が頭の中に一気に入ってきて、あれも大事、これも大事、あれもやりたい、これもやりたい、でも、順位付けることができない」という状況に陥ってしまうということが分かりました。そこで、自分の心の中でやりたいことを思い浮かべて順位付けすることをアドバイスすると、「すごく大事なことを見落とすかもしれない、自分が1つ選択したら、他の可能性を捨てなければならず、その捨てた可能性に対して非常に不安を感じてしまう」と返事をしてくれました。最も良い選択やベストなものがほしいのですが、自分で選ぶことが怖いため、その結果として、時間割を自分の気

持ち通りに上手に組むことができないという学生がこの数年間で多くなったと感じています。

事例3

理解に時間がかかるということも感じます。例えば、教員が指示を与えると、必ずその後に確認をするための質問がなされ、確認してから実行に移すという学生が多いです。つまり、指示を1、2、3と順番を与えずに一気に伝えてしまうと、何をどのような順番でどうしたらいいのかを迷ってしまうのです。学生にとっては、複数の指示や課題を、順番を考えながら処理することに難しさがあるようです。

相談、コミュニケーションの中から

学生の相談、コミュニケーションの中で気になっていることが3つあります。

気になること：その①
落ち込み度合いが激しい学生

「落ち込んだらどんどん落ち込んでしまうし、なんだか危ない感じがするのでどうしたらいいか」と自傷行為（リストカット等）をしてしまう学生の友達から相談をされることがあります。では、どのようなことでそんなに落ち込んだのかを本人が落ち着いた頃に聞いてみると、友達とのメールのやりとりの中で、自分でとても気にしていることがでてくると、友達に嫌われている→もう友達になれない→自分は一人ぼっちになってこの大学の中でどうすればいいか分からなくなってしまうと展開してしまうということでした。その結果、友達との気持ちのいざこざで、数日間、授業を欠席します。このように自分の気持ちのコントロールが非常に苦手なために、学業にまで影響がでてしまうことが多くあります。

気になること：その②
上手くコミュニケーションがとれない学生

最近、学生とメールのやりとりをすると、とても困ることがあります。それはメールをもらっても誰からのメールか分からないことです。つまり、署名が無いのです。普段は友達同士でのやりとりのため、署名が無くてもお互いに分かりますが、それに慣れてしまったために、教員も含めみんなが自分のメールアドレスを知っている、送信すれば理解してもらえると思っています。それを私は他者意識の欠落と解釈しています。あまりにも1対1の関係に慣れてしまったために、このような署名の無いメールが飛び交っているのではないでしょうか。

気になること：その③
匿名でしか自己表現できない学生

一番気になるのが、自分自身を表に出さず、匿名で自己表現をするということです。大学生が引き起こした社会的に大きな事件の多くは、匿名性に守られた中で起こっています。身近なところでも、ゼミで発表をする場合等、自分が前面に出るとほとんど自己表現ができないのですが、自分の存在が分からない状態では、かなり大胆に批判等を含めた表現が飛び交います。ここに、今の若者達の大きな特徴があると思います。

では、匿名性に守られた中でしか自己表現ができないのはなぜかというところを考えていきたいと思います。

大学生の多様化の前に高校生の多様化がある

大学では、大学全入時代に突入し、子供の数の減少、大学進学率の上昇について話題になります。内閣府「平成25年版子ども・若者白書」によると、2012年度の大学・短期大学への進学率は53.6％です。しかし、実はとても大きな意味のあるデータは、高校への進学率ではないかと思います。高校への進学率は、98.3％で、これは、小学校、中学校と同じような感覚であらゆる中学生が高校に入学するということを意味しています。つまり、大学生の多様化の前に、実は高校生の多様化ということに私達は注目する必要があるのではないでしょうか。ここで大学の話を離れ、大学に入る前の高校生達の状態を把握していきます。

まず、彼らは「ゆとり教育世代」といわれています。ゆとり教育では、学習内容や授業時間が削減された中で、週5日制、総合的な学習時間、絶対評価が導入されました。色々な教科を詰め込むのではなく、生徒が自らの力で物事を考えられるように、考える時間や工夫する時間が設けられました。しかし、自ら考える力がつくことよりも、基礎学力が低下し始めたため、文部科学省が「ゆとり」という考え方を修正することになりました。

次に、現在の高校生の実態について、データをみていきます。

■TV会議システムでつながれた全校舎（東海大学福岡短期大学含む）で、教職員合計178名が出席しました。

現在の高校生の実態　（データは、内閣府「平成25年版　子ども・若者白書」より）

❒ 一緒によく遊ぶ友達の人数は、4～6人程度。普段の遊び場は、自宅、友達の家が多くを占める。
❒ 子供の頃の体験と大人になってからの意欲・関心等との関係：自然体験が多いほど、意欲・関心が高い。
友達との遊びが多いほど、規範意識が高い。地域活動が多いほど、職業意識が高い。
❒ 自然体験と理科の正答率：自然の中で遊んだことや自然観察をしたことがある小、中学生ほど理科の正答率が高い。

子供の頃の活動が、大人になってからの意識に結びついていると考えると、家の中で遊ぶ子供が多く、友達の数もそれほど多くない現状は悩みどころである。また、理科の学びは、子供達が自然の中で遊んで、色々なものに気付き、好奇心を持つことがベースとなり、結果的に高校や大学の学びに結びついていく。

❒ 高校生になると97.6％が携帯電話を所有。
❒ 50％前後しかフィルタリングを利用しておらず、44.7％が家庭のルールを特に決めていない。

結果的に子供達は少しでも退屈だと思うと、携帯電話を通じて自分の世界に没頭してしまう。

❒ 80％以上の中学生、高校生が不安や悩みを抱えている。不安や悩みの内訳で一番多いのが勉強や進路について。
❒ 高校生が一番大切だと思うことは、健康、将来の夢を持っている、友達がたくさんいる、ということである。

進路について悩んでいるが、一番大切に思うのは、健康や夢、友達のことである。

❒ 校内暴力の発生件数は2005年から非常に高くなっている。

自分の感情が高まってきた時に、人に向かって暴力を振るってはいけない、物を壊してはいけないという意識があったとしても、子供達のセルフコントロールする力が弱くなっているために、このような結果になっている。

❒ 家庭内暴力の認知件数は、2010年から高くなっている。
❒ 暴力を最も振るうのは中、高校生。理由の59.9％は、しつけ等に反発するため。暴力を振るう対象の62.1％が母親。

家庭内暴力の増加は、ストレス耐性が弱くなったためと考えられる。ストレス耐性は親子関係の中で育つため、少子化が進むと、非常に近い親子関係から母親に対しての甘えが高校生になっても継続しやすく、その結果として、思い通りにならなかった時に、外に向かうのではなく甘えるのと同じような感覚で親に家庭内暴力を振るうことが仮説として考えられる。ストレスに遭遇した時に、自分で考え工夫をして課題を解決していくことが大人として成長するということだが、一部の子供達は高校生や大学生になってもその力が成長成熟できていない。友達付き合いや成績、就職活動等で自分の思い通りにならなかった時に、暴力事件や自分自身を傷つける事故等の形で展開する可能性がある。

❒ いじめの認知件数は2012年度に跳ね上がっている。いじめに起因する事件の検挙・補導は2012年に非常に多い。
❒ いじめの原因は、力が弱い・無抵抗、いい子ぶる・なまいき。

最近、いじめを体験した大学生が多くいると感じる。いじめられた体験は対人不信感につながり、自分自身を出すことを躊躇してしまう。また、おとなしくて素直な子がターゲットになりやすく、例えば、ゼミでの発表中にくすっと笑うような表情をされたことを敏感に受け取り、傷ついて授業を欠席してしまうことがある。

❒ 不登校人数は減少傾向にある（特に中学生）。不登校の主なきっかけは、無気力、不安等の情緒的混乱である。

大学生の不登校が増加している。また、不登校キャリアを持つ（小中高でかつて不登校経験をしたことがある）学生が多く存在している。不登校は集団についての怖さを経験として残してしまうため、不安感、緊張感を抱えながら授業に出ている学生をどのように援助するかが一つの課題である。

❒ 大麻で検挙された全体に占める30歳未満の者の割合は、48.7％。

ストレスに耐えられないこと、見通しが甘いことが考えられる。

❒ 発達障害の可能性がある特別な教育的支援を必要とする小学生・中学生は6.5％。

現在は、具体的な対策がない。どのような援助をすることができるか、今後の大きな課題になると考えられる。

多様化する大学生

再び視点を大学生に戻します。ベネッセ教育総合研究所「高校生の大学選択の基本要因に関する調査」(2013)によると、将来なりたい職業が明確でその職につける大学を選んだという入学者の割合は、国公私立大学で差はありませんが、職業や学問はあまり明確ではなく、進学することだけが目的で入れる大学を選んだ割合は、国公立大学に比べ、私立大学はとても高くなっています。本学にもこのような入学者が増えていると感じます。目的ははっきりしていないけれども、大学に進学すれば自分の方向性が分かるのではないかという期待を持っているようです。つまり、大学に対してはっきりとした目標や意識のある学生がいる一方、高校と同じようなイメージを持ち、卒業すれば何かの力がついていて社会人になれると思っている学生もいるということです。教員は、学生が持っている目的意識にどのような専門性を提供できるかを考えているために、目的意識を持っていない一群が大学の中にいることによって、悩んでしまうことになります。

現在の大学生の課題

学修について：基礎学力、学習意欲、学習スタイルの問題が現在の大学生の学修の課題に関係しています。基礎学力の問題は、入学者の成績の幅が広ければ広いほど、専門を教える前に、基礎学力をどのようにつけてあげたらいいのかを考えざるを得ません。そして、学習意欲の問題については、私は、ろうそくの炎のようなものだとイメージしています。つまり、教員が上手に空気を入れるとふわっと浮かび上がって大きくなり、違うところから風を入れると逆に消えてしまう、学習意欲はそれくらい不安定なものであると思います。学生の学習意欲の向上につながる要因として、教員の熱意、授業内容の自分の将来への関連性、授業の構成、授業内容の難易度の適切さ、学生の積極的な参加、多様性、教員と学生のコミュニケーション、わかりやすく具体的な事例の活用が挙げられます。教育心理学では、学習意欲についての色々な研究の中で、教員が生き生きと教えていると学生に熱意が伝わり、この熱意が学生の不安定な学習意欲を向上させるために大切なことであると考えられています。そして、今の学生は、「この授業は役に立ちそう」ということにとても敏感であるため、授業内容が自分の将来と関連していると思わせることもポイントになります。内容の難易度を設定する上では、基礎学力に違いのある学生達のどこに焦点を当てるのかというところがとても難しいです。また、教員とコミュニケーションが多い学生ほど、意欲が高まるといわれています。これは、「知っている先生の授業は受けやすい」という心理的な作用によるもので、学生とのコミュニケーションのとり方が学習意欲を支える大事なヒントになるかもしれません。

「ふつう」がキーワード　東海大学生の実態

文学部心理・社会学科学生の卒業研究から、以下の調査結果を紹介します。

1. 主に文学部、体育学部、理学部の学生265名を対象とした調査結果：大学に対して「ちょっと騒々しいが、大きくて多様性に富んでいる」と学生はイメージしています。また、教員は温かく、優しく接していると認識し、授業については、総合的に落ち着いた授業が展開され、動きが少ないと感じているということが分かりました。

2. 授業における私語について、352名を対象とした調査結果：授業中の私語の理由について、「授業で分からないことがあった」、「友達から私語をされた」、「授業への抵抗」という結果がでています。また、87％が友達や知り合いと授業を受けているという結果から、自分が受けたい授業というよりは、友達と一緒に授業を受けられるかどうかで授業を選んでいるようです。そして、分からないことがあると友達に聞くために結果として私語につながっていきます。

3. 私語と職業指向性の関係について、200名を対象とした調査結果：理系学生と文系学生を比較したところ、理系の学生は授業内容が難しいと周りに聞くために私語をし、文系学生は友達から話しかけられ返事をするために私語をするようです。

この3つの調査結果から、東海大学生のメンタル的なイメージは、優しいけれども少し自信がない、人との輪を大事にするからこそ周囲に流されてしまう。つまり、「ふつう」がキーワードになっていることが分かります。

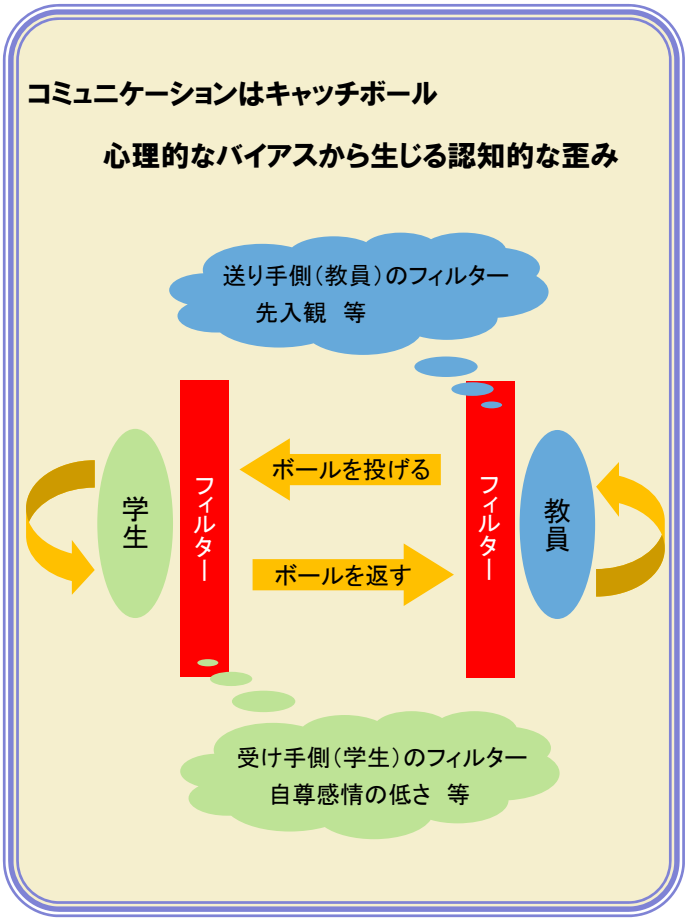
メンタル面について：今の大学生は「ふつう」でありたいと思っています。例えば、授業で代表として選ばれ、みんなの前で発表することになった時にどのように思うかを聞くと、「代表として頑張る」ではなく、「自分は代表としてできないから他の人にお願いしてほしい」という反応をします。つまり、人よりも上を狙うのではなく、みんなの中で間違いなく過ごすことが自分の安心に結びつくと感じています。他者の存在をとても意識して、どのようなコミュニケーションをとったらいいのか分からないので、常に周りを見ながら、自分は「ふつう」になっているか、他の人と違わないのかということを考えています。

また、現在の大学生は、自己概念が曖昧、自尊感情が低く、プライドは高いという特徴を持っているため、就職活動で初めて自分は何者かを考え始めるということがあるようです。そして、プライドが高いことで、できない自分が「ふつう」の中で突出してしまうことを意識し、できないことでも大丈夫だと言ってしまいます。その他にも、先程も触れたように、複数の課題を処理できない、落ち込みが自己否定につながりやすい、ストレス耐性が低い、自己表現が苦手という課題も挙げられます。

コミュニケーションとは

コミュニケーションとは、言語や非言語のボールをキャッチボールすることです。単に言葉の力だけではなく、ほどよい距離感、笑顔、ほどよい声のトーン等、全てがミックスされて初めて良いコミュニケーションとなります。つまり、状況を読み取り、社会的に認められた方法で相互交流をすることが必要で、コミュニケーション能力は言語能力＋社会的能力ということになります。コミュニケーション能力を高めるためには、言葉の表現、語彙力だけではなく、状況についての認知がとても大事です。

適切な対人行動、コミュニケーションが生まれるためには、まず、自己・他者関係の理解と状況の理解を前提に、自分で何か変化を起こすための行動をし、相手がそれについて反応したのを読み取って、更に自分の行動を調整することが必要です。しかし、ここに心理的なバイアスから生じる認知的な歪みがあると、きちんと相手の反応を読み取ることができない、もしくは、間違えた認識をしてしまうことがあります。例えば、遅刻、早退を繰り返す学生に対して、教員の心の中で不真面目だというフィルターがかかった状態では、その学生から体調が悪かったことを報告されても、また怠けたと認識してしまうことがあります。学生にフィルターがかかっていた場合は、教員が友達の名前を挙げて「最近頑張っているね」とボールを投げると、自分に自信のない学生は、「先生は自分が頑張っていないと感じている」というフィルターをかけて受け取り、頑張ってないと認識されていると思い込んで、落ち込んでしまいます。



私達の言葉のやり取り、コミュニケーションの裏には心理的なバイアスがあると認識し、上手にコミュニケーションがとれていない場合には、学生側に自尊感情の低さはないか、そして、教員側に学生に対する先入観はないか、一度フィルターのチェックをしてみると良いと思います。

大学教員に期待される専門性

最後に、私立大学情報教育協会「2012年版―大学教育への提言―未知の時代を切り拓く教育とICT活用」では、大学教員に期待される専門性として、姿勢、研究展開能力、教育指導能力が挙げられています。大学教員に求められる教育指導能力の要素は複数ありますが、その中でも特に自分の専門性がこれだけおもしろいと学生に感動をもたらす魅力を伝えられることが学生を動かす力になると私は考えています。

質疑応答より

質問(教員):

小さい頃の体験及び学習習慣についてのデータを教えてください。

芳川教授:

今の時代、保護者は子供達を安心して外に出せず、また、子供達を外へ出そうと思っても、他に遊んでいる子供達がいないために、結果的に家の中で遊ぶことになってしまいます。自分が子供の頃には、長い休みには、家族一緒に川遊びやピクニックに出かけました。しかし、今は大人が忙しくなっていて、子供達をピクニック等に連れて行く大人が少なくなってしまっているようです。結果として、子供は家の中や身近なところでしか体験することができず、自然体験のチャンスが少ないと言われています。

学習習慣については、高校生までは身についています。内閣府「平成25年版子ども・若者白書」によると、高校生は平均3～4時間位、机の前で勉強しています。しかし、大学に進学した後は30分に減ってしまいます。その差がとても大きいからこそ、大学生の学習習慣を今どのように身につけさせたらいいのか、大学入学の目的、入学後の学習についてどのように大学生活の初年次に伝えたらいいのかという課題が教員には残っていると思います。

質問(教員):

教員は、経験を積むことで自分がかけているフィルターを修正することができると思いますが、学生の場合には、自分でフィルターをかけていると分かっていないこともあると思います。この場合には、フィルターをかけてしまっていることを学生自身に伝えた方が、解決の道を見つけ出しやすいのでしょうか。

芳川教授:

学生自身に伝えるかどうかの判断基準は、自分がフィルターをかけてしまっていることが分かった時に、パニックになるのか、受け止める力があるのかどうかです。パニックになり思考が停止してしまう学生には伝えません。反対に、しっかり受け止め、内省する力がある学生には伝えます。この場合は、むしろ伝えることで数段進歩していくことになると思います。伝えない学生には、日頃の教員とのコミュニケーションの中で、信頼関係を作りながら、緩やかにフィルターの存在を感じてもらうようにしています。

■活発な質疑応答が行われました。

質問(教員):

自尊感情とプライドの違いについて教えてください。

芳川教授:

簡単に説明しますと、自尊感情とは、「私はこの世の中に生きていていいんだ」、「I'm OK」、「将来、自分自身は何か人の役に立つことができる」という感覚、感情のことです。プライドはいい意味では誇りですが、別の意味では「人に自分自身をどのように見られたいか」ということです。

■FD研修会の当日の様子を収録したDVDを貸し出しています(学内のみ)。

問い合わせ先:教育支援センター教育支援課　shien@tsc.u-tokai.ac.jp

■豊富なデータが掲載された当日資料がダウンロードできます(学内のみ)。

教職員ポータル → グループウェア → ライブラリ →A0.各所属のライブラリ → 6062.教育支援課 →FD関連情報

FD、SD、教職協働 について情報をお寄せください。(校舎、学部、職場単位で取り組んでいる活動等)
教育支援センター教育支援課　Tel:0463(58)1211(代)　E-mail:shien@tsc.u-tokai.ac.jp